

傷寒について

山田 恵美

日本鍼灸研究会

【緒言】「傷寒」について、『中医大辞典』第2版では、A 外感熱病全般、B 寒邪による太陽表證、C 冬の寒邪による病證、D 寒邪侵襲の深浅の程度の4種を挙げて説明している。これらの所論は、古典医書に見える「傷寒」の用例を要約できておらず、またなによりも病證の概念の変遷についての配慮がない。よって、「傷寒」の概念整理を試みる。

【三国以前：諸概念の形成】「傷寒」は、まず『素問』に登場する。①寒を得て熱病を起こす病證（熱論「夫熱病者、皆傷寒之類也」、刺志論「氣盛身寒、得之傷寒」、A）、②三陰三陽を十二日かけて伝変する（熱論）、③温に変じた傷寒（熱論。夏至の前後で病温と病暑に分ける）、④病温（評熱病論）、⑤五蔵の熱病（刺熱）の5種に要約できる。

『難経』は、⑥金の性質を持つ五邪のひとつ（四十九難、五十難）、⑦広義の傷寒（五十八難。中風、傷寒、湿温、熱病、温病。①と③を敷衍）の2種である。

『傷寒論』は、⑧冬の寒邪に触冒されて発證する病證（傷寒例。病因を定め、病證の範囲を限定する。C）、⑨温病・暑病（傷寒例。すぐに傷寒を発せず、春以降に変じて病となる温病を論ず。③病温・病暑を季節と明確に関係づけて温病は春、暑病は夏とし、かつその季節に反する時行の気による病證ではないと規定）、⑩三陰三陽病（②を敷衍か）、⑪太陽病を狭義の傷寒とする（弁太陽病脈證并治。B）の4種である。

【隋唐：熱病の全体像構築】『諸病源候論』（以下、『病源』と略す）において諸概念が熱病として総括される。構成は、傷寒諸病（冬。『傷寒論』①⑧⑨）、時気病諸候（時気＝時行之気）、熱諸病（夏。『素問』①⑨⑤②）、温病諸候（春。『素問』④）・疫癘病諸候、瘧病諸候（秋。『素問』瘧論）・黄病諸候・冷熱病諸候となっている。これらは、⑨温病・暑病の論をもとに、四時や時行之気に関わる時気病・瘧病（秋）・疫癘病（節氣不和）と何らかの熱を病因とする黄病・冷熱病を加えており、①熱病全般の全体像を構築したと見ることができ。ただし、『傷寒論』の⑩⑪、『難経』の⑥⑦は載録されていない。

『外台秘要方』は、『病源』の論を踏襲するが、冷熱病に替えて霍乱門（嘔吐を含む）を置く。『聖濟総録』は、さらに瘧病門の前に中喝門（暑熱による）を加える。逆に、『千金要方』は傷寒（『脈経』や『小品方』などの論を用いており、異質）・黄病・瘧病（温瘧）とし、『太平聖恵方』は傷寒・時気病・熱病としており、熱病の範囲が狭められる。

【宋：六淫論からの新たな病證構築】『三因極一病證方論』（以下、『三因方』と略す）は、隋唐から一変して、六淫論の観点からの病證論を展開し、寒證を重篤な「中寒」と軽證の「傷寒」に分立した。違いについては、巻2・叙中寒論において「中寒」は五蔵（裏）に中るために重く（親和性の高い腎が邪を受けやすく最も重證）、「傷寒」（原文は「寒」）は経絡（表）に中るために軽いと述べている。また他の風・暑・湿（巻2・外所因論「以暑熱一氣、燥湿同源、故上経収而為四」）も同様に「中」と「傷」が分けられ、各證の軽重を一挙に提示している。

【後の議論】『三因方』の六淫論を「中」と「傷」に二分した枠組は、寒門にのみ残った。「傷寒」と「中寒」の違いに議論が集中したことによる。両者を分立するか、寒門の中で両者を論じるか、いずれか一方のみを挙げるかに分かれるが、両立させる医書が多い。なお、概念の叙述には、隋唐以前の「傷寒」概念が大きく取り込まれることは少なく、また相当の違いが見られることから、試行錯誤の跡がうかがえる。全体の整理は容易ではないが、『三因方』の提示した軽重の違いはおおむね引き継がれている（『万病回春』より中寒などを類中風とする説も出た）。

【結語】「傷寒」の議論は、隋唐以前の病證状を中心にした「傷寒」熱病論と、宋以降の病因の面からの寒證論に二分できる。